

ラヴィルマルケとリユーゼル（三）

—いわゆる「バルザズ・ブレイス論争」について—

梁 川 英 俊

ルナンの『ケルト民族の詩歌』

『ケルト民族の詩歌』*La poésie des races celtiques*は、一八五四年二月一日、『両世界評論』*Revue des Deux Mondes*に発表された。著者のルナンは一八四八年に哲学の大学教授資格試験に首席で合格、国立図書館古文書部に勤務する傍ら、五二年にアヴェロエスに関する論文で博士号を取得し、文字通り新進気鋭の学者として、『両世界評論』や『デバ』を中心にパリのジャーナリズムで活躍を始めたばかりだった。彼はこう書き出す。

アルモリカ半島を旅して、ノルマンディーやメーヌの明るいがありふれた風景が続く大陸側の地方を過ぎ、正真正銘のブルターニュに、言語と民族によつてその名に値する真のブルターニュに足を踏み入れるや、辺りの気配が一変するのが感じられる。漠とした悲しみに満ちた風が吹き起こり、魂をほかの思念へと誘うのだ。木々の頂は葉を散らし、風に身をたわませる。荒野はその単調な色調を彼方へと広げる。花崗岩はいたるところで、それを覆うにはあまりに痩せた土地を貫いている。ほとんどいつも暗澹とした海は、水平線で果てるともない嘆きを繰り返している（一）。

ブルターニュの風景を際立たせるこの特徴を、著者はそこに住む人においても強調する。いわく、ノルマンディーの間は粗野で恰幅がよく、享樂的だが、ブルターニュの人間は慎み深く、繊細で宗教的だ、等々。そればかりではない。彼はまた海の向こうのブリテン島へと目を転じ、同様の特徴はイングリランドからウェールズへ、あるいはスコットランドのローランドからハイランドへと至るときにも、さらには幾分のニュアンスの違いはあれ、アイルランドの各地に赴くときにも明らかに感じられるものだと言及するのである。こうして、ケルト民族というひとつの民族が姿を現す。

この独自の民族の研究において、著者がその突出した功績を称えるのがウェールズである。なかでも彼はオーウェン・ジョーンズの『ウェールズの考古学』とシャーロット・ゲスト夫人の『マビノギオン』の二著を挙げ、とくに後者については「同時代のもっとも見事な文学的記念碑のひとつ」⁽²⁾、「ケルト的精髓の真正の表現」⁽³⁾と激賞した。

一方、対照的なのが、同じテキストの仏訳者である同郷人になりたいする態度だった。ルナンがその仏訳について言及するのはただ一カ所、しかも脚注においてのみである。いわく、「ラヴィルマルケ氏は一八四二年に『古代ブリトン人の民話』の表題で、シャーロット・ゲスト夫人が当時すでに英語で公刊していた『マビノギオン』と、彼女がそこに付した註の一部を仏訳して発表した」⁽⁴⁾。さりげない一節であったが、彼はそこで、すでに述べたゲスト夫人とラヴィルマルケの先行権争いに、あつざりとけりをつけていた⁽⁵⁾。しかも、ほかならぬゲスト夫人を称賛する文の後に付けられたその脚註は、それゆえラヴィルマルケの敗北をいっそう際立たせてもいたのである。

さらに、ルナンはまた『マビノギオン』の起源をブルターニュに引き寄せようとするラヴィルマルケの所説にも言及し、こう批判していた。

「円卓」の伝説の生成あるいは伝播にあたつて、アルモリカのブルターニュがいかなる役割を果たしたのか。私はその役割はかなり誇張されてきたと考えている。ウェールズの英雄伝説が、このキムリス語族の一派のうちで長い間生き続け、それがアルモリカに渡つてきたということについては、ヴォルティゲルンやゲレイントやユリアンやほかの英雄たちがバス・ブルターニュで聖人になったのを見ると、疑うことはできない。しかしアーサーの詩的変容が負っているのが、ウェールズのブリトン人ではなく、フランスのブルトン人であるということ、またウェールズの『マビノギオン』が、ラヴィルマルケやほかの批評家の言うように、アルモリカ半島が揺籃の地であつたかもしれない伝承の変質した姿しか伝えていないということは、シャーロット・ゲスト夫人の見事な書物をナショナルな偏見なしに読む者にとつては、とても受け入れ難い仮説である。この伝承においては、場所も血統も習慣もすべてがウェールズのものだ。アルモリカとのつながりは、アーサー王の宮殿にあつては副次的な人物であるオエルだけである。しかも、もしアーサー王物語群の起源がアルモリカにあるのなら、どこかにその輝かしい出現を伝える話が残つていてもいいではないか⁽⁶⁾。

こうしてルナンは、ラヴィルマルケが『古代ブリトン人の民話』で苦心して展開した主張を、「ナショナルな偏見」と一蹴してしまう。しかしながら、ラヴィルマルケは『バルザズ・ブレイス』の第二版でアーサー王を謳った歌を収録していたではないか。そのことはどう評価するのか。この問いにルナンはこう答える。

たしかにラヴィルマルケ氏は、いまなおブルターニュで歌われている民衆歌でアーサーが称揚されていると言いはする。実際、その『ブルターニュの民衆歌』にはこの英雄の名が出てくる歌が一、二ある。しかしこれは、ラヴィルマルケ氏によって公刊されたこの貴重な歌集を使う際には、いかなる用心が必要かを示す一例である。(……)アーサーの

名は彼が歪曲した幾つかの名前のうちのひとつではないのか。ラヴィルマルケ氏の耳は、自分が聴きたいと思っている名前を好んで聴いてしまったのではないか。少なくとも、これほど大胆な仮説の拠って立つ基盤が、千年来内容も理解されぬまま農民によって歌い継がれてきた一篇の歌というのでは脆弱である。ウェールズの文学のうちに、アルモリカのブルトン人の文学の色褪せた似姿しか見ないという臆断が、ここでラヴィルマルケ氏に幾らかの誇張をさせてしまったのだ⁽⁷⁾。

ルナンは円卓物語のブルターニュ起源説を「ナショナルな偏見」と断じるばかりではない。その偏見はまた、収集の客観性を損なわせていると指摘してもいたのである。しかも彼は註において、その主張を一歩進めてこう書き記す。

この興味ある歌集を確認もせずにそのまま受け取ってはならないし、何の疑いも抱かずに引用すれば深刻な不都合が起きてしまうこともある。ラヴィルマルケ氏が、彼がその初の紹介者であるという後世に残る栄誉を担う歌を注釈しようとするとき、その考証はいかなる反論も免れているとは言い難いし、彼がそこにあると考えている歴史的な言及の大半は、確実である以上に巧妙な仮説のように思われる⁽⁸⁾。

ルナンは『バルザズ・ブレイス』について、その史料としての信頼性に関しては、けっして疑念を隠そうとはしなかった。しかし、だからといって彼はこの作品の価値まで否定したわけではない。それどころか、「温和さ、忠実さ、諦観、奥ゆかしさといったブルトン民族の性格を成す特徴が、これ以上ないほどはっきりと現れている(……)一個の魅力的な文学⁽⁹⁾」としては、この歌集に称賛を惜しまなかったのである⁽¹⁰⁾。

続く『六世紀のブルターニユのバルドたち』に関するルナンの批判は、さらに厳しかった⁽¹¹⁾。彼はこう書く。

これら古詩のテキストは『マヴィルの考古学』*Archéologie de Myrur*に以前から発表されていたものであった。ラヴィルマルケ氏はそれを抜粋し、初めて翻訳しようと試みたのである。むろん、これは大変に困難な仕事であり、たとえこの博学な編者に非難すべき点があるにしても、それは彼がその困難のすべてを解決しなかったことにはなく、むしろあまりにも簡単に解決してしまったことにある。ここでラヴィルマルケ氏は、彼の大方の仕事においてそうであるように、ブルターニユのことしか考えておらず、ウェールズ文学がケルト研究において独自の世界をなしており、ほかから切り離して研究されるべきものだということを十分に理解しているようには思えない。もし彼がブルターニユで読まれ得たかもしれないウェールズのバルドたちの詩を集めようとしたならば、少なくともその思いつきは失敗に終わっている。というのも、あえて言うが、その歌は彼が紹介しているような形でも、今日のアルモリカのブルトン人に理解できるとは思えないからだ。彼がもし真の校訂版を作ろうとしたならば、文献学者たちは、十九世紀のブルトン語によって六世紀のウェールズ語のテキストを解釈、いや創作しようとするのを見て、深刻な異論を唱えないだろうか。実際、ラヴィルマルケ氏は、ウェールズ語のテキストをブルトン語に近づけようとして、しばしばかなり恣意的な変更を加えるのだ。率直に言って、この本はバルドの文学に関する重要な情報を含んではいるが、『ブルターニユの民衆歌』に続く価値があるとは思えない⁽¹²⁾。

『六世紀のブルターニユのバルドたち』に収録されている作品は、すべて十二世紀から十四世紀にかけて作られた写本を原典とするものであり、そのテキストには多くのヴァリアントがあるばかりか、綴り字の面でも不規則だった。この著

作でラヴィルマルケが企てたのは、そうした不都合を一掃すべく、ルゴニーデックの綴り字法によってテキストを再構成することだったのである⁽¹³⁾。ルナンが「十九世紀のブルトン語によって六世紀のウエールズ語のテキストを解釈、いや創作しようとする」と語ったのは、このことを指していた。要するに、ラヴィルマルケはそこで自らのブルトン語純化運動の方法を、あろうことかウエールズ語の古詩にまで適用しようとしたのである。

こうした企ての背後にあったのは、おそらく、六世紀のウエールズ語と十九世紀のブルトン語の類似性という根強い確信であった⁽¹⁴⁾。しかし、その確信を共有しない者にとっては、その企てはほとんど理解し難い行為と思われるも仕方がないものであった。その意味で、このルナンの批判はきわめて正鵠を得たものだったのである。

そればかりではない。この論考においてルナンが展開した批判はすべて、その反論を許さないほどの的確さによって、実はのちの「バルザズ・ブレイス論争」の引き金をも静かに引いていたのである。

栄誉のなかのラヴィルマルケ

もちろん、ルナンの批判がいかに適切なものであったにせよ、それはラヴィルマルケの評価に即座に影響を与えるようなものではなかった。それどころか、彼の活動はその後も衰えを知らなかった。実際、翌一八五五年には、「フランス西部諸県の歴史と文学に関する写本の調査」という名目で、公教育相から二度目のイギリス行きの旅費を獲得すると、その年の五月と十二月に二度にわたって海峡を越え、帰国後はその成果を『古代ブリトン人の主要な写本の概要』*Notice des principaux Manuscrits des anciens Bretons*なるパンフレットにまとめている。さらに翌五六年初頭には、同じく写本の調査のために、ローマとフィレンツェにも赴いている⁽¹⁵⁾。

いまだに引用されることが多い、ジョルジュ・サンドの『バルザズ・ブレイス』礼賛が現れるのもまたこの頃のこと

ある。以下、その一部を引こう。

フランスのなかでただひとつの州が、詩において、かつて最大の詩人の天才が、あるいは最高に詩的な国民の天才が達し得た高みにある。いや、凌いでいるとさえ言えるだろう。われわれはブルターニュのことを語りたいのだ。しかし、ブルターニュがフランスになったのはそれほど昔のことではない。ラヴィルマルケ氏によって収集・翻訳された『バルザズ・ブレイス』を読んだ人は誰でも私に同意し、私の言うことに深く納得してくれるはずだ。――『ノミノエの租税』は一四〇行からなる詩篇だが、『イリアス』よりも偉大で、人間精神が生み出したいかなる傑作よりも完璧だ。このブルターニュの歌集に収録された「エリアンのペスト」や「レズ・ブレイス」やその他二〇余りの輝かしい作品は、叙情文学が要求しうる最高の豊かさを示しているのである。(……) 実際、物を書く人間ならば誰でも、ブルトン人に出会えば帽子を脱がずにはいられないだろう⁽¹⁶⁾。

高名な作家によるほとんど絶賛と言っているこの賛辞は、『バルザズ・ブレイス』の評価がすでに十分に固まりつつあることを示していた。実際、この頃のラヴィルマルケには多くの世俗的な栄誉がもたらされる。一八四六年にすでにレジョン・ドヌール勲章を授与されていた彼は、一八五一年にはヤーコブ・グリムの推薦によって、ベルリン王立アカデミーの外国人会員に満場一致で選出される。まだ三十六歳という若さであった。それだけでも十分に異例なことだったが、七年後の一八五八年には、今度はフランス学士院入りという最高の名誉が加わる。このときラヴィルマルケは四十三歳。ちなみに対立候補となったのは、アルシス・ド・コーモン Arcisse de Caumont とド・ラステリー De Lasterie という高名な二人の考古学者だった。

執筆活動の方も衰えを知らなかった。学士院に入会した年には『魔術師メルラン』*L'Enchanteur Merlin*を出版、『バルザ
ズ・ブレイス』にも印象的な歌が幾つか収録されたこの神話的な人物に具体的な輪郭を与えた。翌五九年には、すでに出版されていた『古代ブリトン人の民話』を『円卓物語と古代ブリトン人の民話』*Les Romans de la Table Ronde et les Contes populaires des anciens Bretons*と改題し、大幅な加筆を施した上で再版、同じ年にはまた『アイルランド、カンブリアおよびブルターニュにおけるケルト伝承』*La Légende celtique en Irlande, en Cambrie et en Bretagne*も刊行し、聖パトリック、聖カドク、聖エルヴェというこのケルト圏の三地域を代表する聖人の伝承を紹介した。

もつとも、その身边にあったのは朗報ばかりではなかった。たとえば一八五八年には、ともにルゴニーデックに学んだ盟友ブリズーを失っている。ブルターニュを讀える多くの詩を残したこの詩人は、晩年は健康を害し、故郷の陰鬱な気候に耐えきれずに、数年をイタリアで過ごしてもいた。終焉の地は南仏モンペリエであった⁽¹⁷⁾。

ところで、ラヴィルマルケはその多忙な活動の傍ら、またブルターニュの文学者たちの活動にも関心を寄せ、これとは思う作者にしばしば激励の手紙を書き送つてもいた。一八六二年四月のある日、彼はカンペルレの新聞『ピュブリカトゥール・デュ・フィニステール』*Publicateur du Finistère*に掲載された「ブレイズ・イーゼル」(「バス・ブルターニュ」)*Breiz - Izel*という詩に目を止める。

君は知っているだろうか？

岩の上に櫟の木が聳え、

戸口ではバルドが歌い、

浜辺に海がざわめく国を⁽¹⁸⁾。

ということなくゲーテの「ミニヨン」を思わせる一節で始まるこの詩は、ラヴィルマルケに三年前に世を去ったブリ
ズーの詩を彷彿とさせた。彼はさつそく同紙の編集者に宛てて、作者を賞賛する手紙を書き送る。

四月十三日号に掲載された「ブレイズ・イーゼル」という題の小詩の作者に、私からの賛辞を伝えていただきたく、
仲介をお願いする次第です。こんなに魅力的なものを読んだのは、久しぶりのことです。私たちの国は新たな詩人に敬
意を表さねばなりません。私たちは「テレン・アルヴォール」（「アルモリカの豎琴」）*Telenn Arvor*の著者の死を嘆い
ていました。その人が戻ってきたのです。ブルターニュは一本の枝が切られるやまた別の枝が生えてくる、ウェルギリ
ウスが歌ったあの黄金の枝をもつ樹のようなものなのです⁽¹⁹⁾。

ほどなくラヴィルマルケのもとには、詩人から長文の返事が届く。彼はそこで自分がほかならぬ『バルザス・ブレイス』
の愛読者で、また民衆歌の収集家でもあることを告げていた。

私が書いた「ブレイズ・イーゼル」なる小詩について、それが掲載されたカンペルレの新聞社から伝えられた賛辞に
たいしては本当に感謝の言葉ありません。もちろん貴殿はこの種の事柄についてもっとも的確な判断を下し得るお方
であり、過分なお言葉は私にとってこの上もなく貴重なものです。貴殿の『バルザス・ブレイス』は私が生まれてこの
方もっとも称賛してきたもののひとつで、どこに行くにも必ず持ち歩いておりますし、ほかのどんな言語で書かれた本
であれ、私にとってこれに勝るものはありません。（……）私は現在でもいまは亡き「ブルターニュ文学」の復活を夢

見ておりますし、そのためにささやかではあれ、何か貢献ができればと考えております。(……) 私はこれまで私の田舎で熱心に民衆歌を収集してきましたし、その数も有に一書を成すほどに達してはおります。しかし『バルザズ・ブレイス』を読み返す度に、それを出版しようという計画はたちまち消えてしまうのです⁽²⁰⁾。

差出人の住所はカンペール。末尾の署名には「リユーゼル」とあった。

VI 収集家フランソワ・マリイ・リユーゼルの誕生

生い立ち

フランソワ・マリイ・リユーゼル François-Marie Luzel は一八二一年六月、コート・デュ・ノール県はプルアレ Plouaret のケランボルニユ Keranborgne で生まれた⁽²¹⁾。ラヴィルマルケが生まれたのが一八一五年七月だから、彼よりも六歳年下ということになる。しかしながら、彼らの間には、年齢的な差をはるかに上回る社会的・文化的な差があった。なによりもラヴィルマルケは貴族の出身、リユーゼルは農民の出身である。そればかりではない。リユーゼルの家系はまた村でも指折りの共和派だったのである。

彼の父方の叔父のひとり、エティエンヌ・ルブルドネック Etienne Le Bourdonnec は、国民衛兵の指揮官として、恐怖政治の際に何人もの反革命容疑者を断頭台に送っていた。しかも彼はプルアレの村で反乱を起こして、血みどろの弾圧の原因をつくった張本人でもあった⁽²²⁾。

彼ほどではなかったが、リユーゼルの父方の祖父もまた共和派に数えられる人物だった。この人は大革命の際に国民衛

兵の隊長として活躍し、革命後は小作人の身分からケランボルニュの所有者になった⁽²³⁾。加えて、彼はまた亡命貴族の財産を我がものとしたプルアレの数少ない農民のひとりでもあった⁽²⁴⁾。

一方、リユーゼルの父は一七九一年の生まれ。一八一三年に召集されて、ナポレオンの征服戦争に参加した後、父親からケランボルニュの土地を引き継いだ。リユーゼルの最初の詩集『剣の歌』*Chants de l'Épée*に収録された「二人の敵弾兵」*Les deux grenadiers*なる作品に付された献辞を信じるならば、彼の父はナポレオンの儀仗兵であったという⁽²⁵⁾。

リユーゼルは男六人、女六人の十二人兄弟の二番目で、長男だった。親兄弟との関係は、幼時からしごく良好なものであったらしい⁽²⁶⁾。実際、彼は父母をしばしば詩に歌い、兄弟たちも彼の収集には援助を惜しまなかった⁽²⁷⁾。シャルル・ルゴフィックが伝えるところによれば、彼の三人の妹ペリーヌ、セラフィヌ、マリー・イヴォンヌは老いてもなお故郷を離れず、求めに応じては兄の思い出を語り続けたという⁽²⁸⁾。むろんリユーゼルの方も、終生自分の生まれた土地を讃えて、そこで過ごした日々を慈しむことをやめなかった。たとえば、最晩年においてなお、彼は『ケランボルニュ』なる一篇の詩を物し、こんなふうに書いている。

いまや私も年老いてしまった（六十九歳）。——それでもなお訪ねてみたかったのだ——私が生まれた家とその畑と森を。——そしてそこに私の幼年時代の影を探したかったのだ。

やあ、ケランボルニュ！ 私の心は、——そこに近づくや打ち震え始める。——昔の思い出が群れを成して頭のなかに押し寄せる。——そして美しい夢が木の葉のように降りそそぐのだ⁽²⁹⁾。

こうした子供時代の思い出はまた、リユーゼルにあつてはブルトン語とも深く結びついていた。ブルトン語こそ彼の母

語であり、フランス語は学校に入って初めて学んだ言葉だったのである。「十二歳のとき、私はフランス語とラテン語を同じくらい知っていた。つまり、どちらもほとんど知らなかったということだ⁽³⁰⁾」とのちに彼は語っている。

当時、学校ではブルトン語は禁止されていた。フランス語にブルトン語風の表現を混ぜると、罰として教室の真ん中で何時間も跪かされたという⁽³¹⁾。とはいえ、この頃は学校へ行くことはまだ義務ではなく、田舎ではその雰囲気も随分とのんびりしたものであったらしい。実際、学校をさぼって朝から野原を駆け回ったり、木登りや鳥の巣を盗んだりした思ひ出を、後年リユーゼルはしばしば愉悦的な調子で回想している⁽³²⁾。

ところで、この少年時代の記憶のうち、のちの収集家リユーゼルを語るうえで欠かすことができない出来事がひとつある。聖史劇『聖トリフィヌとアーサー王』*Sainte Tryphine et le roi Arthur* の上演である。一八三二年の復活祭に隣村のヴェュー・マルシェ *Vieux-Marché* で二日間にわたって行われたこの上演は、少年リユーゼルのうちに生涯忘れ得ないほどの強い印象を残した。

もともと、彼は実際の舞台を見たわけではない。よろず芝居なるものにたいして反感を抱いていたプルアレの司祭が、村人に芝居を見に行くことも舞台に立つことも禁止したのである。まだ十一歳だったリユーゼルも、両親とともに大人しく家にいるほかはなかった。しかし、それでも広場に舞台が設えられ、方々から人々が寄り集うその独特の祝祭的な雰囲気は、彼を興奮させるに十分なものだった⁽³³⁾。後年、リユーゼルはこう回想している。

この上演が終わってからかなりの時が経っても、一日の仕事を終えて夕暮れ時に家路につく日雇や職人たちが、いつも道路や農道で『聖トリフィヌ』の長台詞を大声で朗誦していたのを、私はいまだに覚えている。見ず知らずの二人の人間が、しばしば随分離れたところから台詞を交わし合うのを、人々は足を止めて楽しそうに聴いていたものである⁽³⁴⁾。

それからほぼ三〇年後、リューゼルが上梓した最初の本は、ほかならぬこの『聖トリフィーンヌとアーサー王』の校訂本であった。この少年時代の記憶が、彼にとってどれほど忘れ難いものであったかが窺えよう。

もつとも、こうした特別な場合ではなくとも、リューゼルがブルターニュの民衆文学と接する機会はほとんど日常的にあった。その代表的な例が、「夜の集い」*veillée*である。ふつう万聖節の頃から、主の奉獻の祝日あたりまで行われたというこの「夜の集い」では、家族はもちろん、ときに近隣の人々全員が集まって、農具の手入れや糸紡ぎをしながら、四方山話に花を咲かせたり、昔話や歌などを披露し合ったという。その様子は、たとえば先に引いた『ケランボルニュ』にも次のように描かれている。

ここに大きな暖炉が、そこに父の長椅子があった。――冬の間は毎晩、大きな火を熾したものだ。――周りには作男が並んで煙草を吸い、――仕事のことを語ったり、衣服を乾かしたりしたものだ。(……)

女中は後ろ、続き部屋の下にいて、――糸車の側に座って糸を紡いでいた。――突然、なかのひとりが澄んだ声で歌い出した、――哀れを催すグウェルスか陽気な小唄を。(……)

夜が更けると、しばしば――旅回りの乞食が宿を乞いにやって来た、――雨に濡れ、凍えた手足で、――疲れ果て、空腹を抱えて、アルゴアからやって来たのだ。

夕食を終えると、彼は火に近づき、――大人からも子供からも歓待されて、――グウェルスやソーンを歌い、――小話を語り、不思議な話を山ほど聞かせてくれたものだ。

私は、暖炉の片隅で、小さな腰掛けに座り、――静かに彼の話を聴いていた、驚き、戦きながら……――一方、外は

雪、風も強く、屋根にはつらら、——犬一匹、出られぬような天気である（35）。

冬の夜の炉端で繰り広げられるこの「夜の集い」の情景を、リユーゼルは生涯この上ない幸福感とともに喚起し続けた。のみならず、彼はその思い出を文学的に再構成しようと、さまざまな試みを続けたのである。そうした試みの一部は『ブルターニュの夜の集い』*Veillées bretonnes*（一八七九年）と題されて、彼の生前に発表されたが、そこに漂う幼年時代への強い郷愁は、この「夜の集い」の記憶なしにはまた収集家リユーゼルもあり得なかったことを教えてくれる。

もっとも、ひとりの収集家の誕生には記憶だけでは十分ではない。少なくともリユーゼルの場合には、そこにひとりの人物がいた。名をジュリアン・マリー・ルユエルという。

叔父ジャン・マリー・ルユエル

リユーゼルの母には五人の異父兄弟がいた。彼女の母親が最初の夫に先立たれた後、再婚してもうけた子供たちだったが、リユーゼルの母は、彼らの両親の死後、この異父兄弟を引き取って育てた。そのひとりがジュリアン・マリー・ルユエル *Julien-Marie Le Huërou* だった。

ルユエルは一八〇七年の生まれで、リユーゼルよりも十四歳年長だった。トレギエ、サン・ブリュー、レンヌのコレージュで学んだ後、エコール・ノルマルに入学し、ミシュレに師事した。その後、文学の教授資格試験に合格して、パリとナントのコレージュに勤めたのち、一八三四年にレンヌの王立コレージュに赴任した。この転任はリユーゼルの人生に大きな転機をもたらすことになる。

というのも、翌年、ルユエルはまだ十四歳だった甥のリユーゼルを自分のコレージュに呼び寄せたからである。むろ

ん甥の将来を考えてのことであつたが、ケランボルニュの田園生活に馴染んだりユーゼルにとって、初めての都会での生活はなかなか辛いものであつた。「レンヌのコレージュでは、ちよつと自分勝手な行動をとるだけで懲罰が雨あられと降りそそぎ、休み時間にはいつも校庭の壁をよじ登りたい衝動に駆られたものだつた⁽³⁶⁾」と彼はのちに回想している。

もつとも、このコレージュで彼は幾人かの得難い友と知り合いになつた。やがてブルターニュを代表する歴史家となるアルチュール・ド・ラボルドリー Arthur de La Borderie、『ルヴュ・ド・ブルターニュ・エ・ド・ヴァンデ』*Revue de Bretagne et de Vendée*の編集者になるエミール・グリモー Emile Grimaud、膨大な民謡を収集した収集家ペンゲルの助手を務めることになる従兄ギヨーム・ルネ・ケランブラン Guillaume-René Kerambunなどである。

一方、叔父は都会生活に四苦八苦する甥を尻目に、コレージュでの仕事の傍ら、執筆活動にも精力的に取り組んでいた。一八三八年には学位論文『ガリアにおけるフランク人の定住』*L'Etablissement des Francs dans la Gaule*で博士号を取得、一八四〇年には『メロヴィング朝の体制』*Les Institutions mérovingiennes*なる著作を上梓して、学会でも高く評価された。しかもまた、彼は早くから故郷ブルターニュの文学や文献学にも並々ならぬ関心を寄せ、それを自らの主要な研究テーマのひとつと考えてもいた。その関心はまた、八歳年下のラヴィルマルケはもちろん、ブリズーやスーヴェストルにも先駆けるものであつたという⁽³⁷⁾。もつともその姿勢は、ラヴィルマルケたちのそれとは随分と異なつたものであつた。たとえば、彼はこう書いている。

今日、もはや州はなく、州の高等法院も三部会もない。われらが善良なる先祖たちの少々反抗的な愛郷心にとつてあれほど貴重であつた州のナシヨナリテも、すべて広大で強力なフランスのナシヨナリテとその議会のなかに溶け込み、消え去つたのである。ブルターニュはほかのすべての姉妹たちと同様、たしかに心ならずも、その同胞たちの最後に、

太古から続いてきた独立への誇り高い野望を捨て去ったのだ。ほかのケルト諸国がとつくの昔に失っていたあの野望を、である。この古い対抗意識は、近頃また激越なロビノー師の口から荒々しく語られていたし、またそこ以外に戦うべき場所がないので、書棚の埃を巻き上げながらフランスの支配権に抗うための武器を探していたが、いまではもう時宜も重要性も失っている。この問題は過去にそれがもっていた強い関心を失って、抽象的で客観的な学問へと墮してしまい、復活の兆しもない。その問題をまた引っぱり出そうとしたところではいかなる利益もないのだから、われわれにはそんなことをする動機もないのである⁽³⁸⁾。

見ての通り、ブルターニュのナシヨナリテをすでに消え去ったものと考えるルユエルの立場は、ラヴィルマルケ一派が標榜するナシヨナリスト的なイデオロギーと真つ向から対立するものだった。しかも彼はルゴニーデックの改革にたいしても否定的で、一八三九年に彼の『ケルト・ブルトン語文法』第二版が出版された際にも、その新しい綴り字法の有効性を疑問視する発言をしていた⁽³⁹⁾。ルユエルがケルト学に望んでいたのは、それが純粹な学問として確立されること、ただそれだけだったのである。たとえば、レンヌ大学文学部長に宛てた書簡のなかで、彼は次のように書いている。

私の目的は、古ケルト語にそれがインド・ゲルマン語において占めていた真の場所を返してあげることです。その場合、あれほど多くのすぐれた人々が、この哀れなケルト語をめぐってでっちあげた愚かしい誇張とできるだけ無縁であらねばなりません。そのために、私はケルト語をその文法書や辞書のなかで、私が幾らかの知識をもっている言語、すなわちラテン語、ギリシャ語、ドイツ語およびその多くの方言と比較したいのです。いままでこの問いに取り組んだ人は、ラテン語やギリシャ語をほとんど知らない人か、ケルト語はひとことも知らず古典語に凝り固まっている人のどちら

らかでした。(……) むろん、私は真に学問的な解決に至るためには、あらかじめケルト語のすべてをマスターしていなければならないということを知っています。(……) われわれが自分たちの州(ブルターニュのことですが)の歴史の起源が明らかになるのを期待できるのは、ほとんどこの視点からのみなのです⁽⁴⁰⁾。

こう語るルユエルの希望は、レンヌ大学にブルターニュ文学の講座をつくり、自らそのポストを占めることであったという⁽⁴¹⁾。しかも氣鋭の学者であった彼は、おそらく十分にそれを期待できるだけの立場にいた。実際、あくまでも代理教授という身分ではあったが、彼はすでにレンヌ大学で外国文学や歴史学の講義を担当してもいたのである。とくにその歴史学の講義は大変な成功を収め、時の文部大臣ヴィクトル・クーザンから、特別に選抜試験なしで歴史学の教授資格を授与されるという栄誉に浴していたほどだった。「皆が彼の話を聴きたがり、町中が講義室の狭すぎるドアに向けて押し寄せたのである⁽⁴²⁾」とは歴史家ラボルドリーの言葉である。

しかし、こうした高い社会的評価は、また過酷な労働という代価を伴っていた。一八四三年九月、ルユエルは激務に追われる自らの状態の改善を訴えるべくパリを訪れる。その頃、彼は自分が正当に評価されていないという思いに悩まされており、また結婚や代議士への立候補といった個人的な問題も抱えていたという。このときパリで何があったかは分からない。が、帰路ナントに立ち寄った彼は、ロワール河畔をさまよい歩き、夜になっても帰らなかった。

一八四三年十月九日早朝、ルユエルは川端の一本の柳の木で縊死体となって発見される。学者としての輝かしい将来が保証されているかに見えた矢先の、あまりにも突然の死であった。ポケットにあった手帳には、震える字で「神と家族に許しを請う」と走り書きされていた。まだ三十五歳の若さだった⁽⁴³⁾。

最初の調査旅行

この叔父の死を、リユーゼルがどこでどのように聞いたのかは分からない。のみならず、その後数年の彼の足跡を伝える資料もほとんどない。ただ一八四〇年に叔父のもとを離れてケランボルニュに戻り、翌年バカロレアの試験に合格して、ブレスト大学の医学部に登録したことが知られているくらいである。海軍医学校の受験を勧める叔父の手紙が残っているが、その助言に従った様子は無い。もともと詩作には励んでいたらしく、一八四三年八月の『ジュルナル・ド・ラニオン』*Journal de Lannion*には、彼の手になるブリズーに捧げられた六二行からなる書簡体詩が掲載されている。リユーゼルが公にした最初の詩だった。

その後、彼が再びわれわれの前に姿を現すのは、一八四五年八月十日付の公教育相サルヴァンディー宛の書簡においてである。住所はパリのエコール・ド・メドウシン通り。自称、法律の学徒であった。彼はこう書いていた。

いまは亡き叔父の名は、私にとってその死後もなお、私のブルトン人的な性格が深く嫌悪する逆境と忘却から身を守る盾なのであり、学問と名誉と誠実さの道において彼の足跡を辿りつつ歩く方法を教えてくれる支えなのです。(……)私の意図は文学研究を諦めることなく法律の勉強を続けることであり、私の野心は叔父が残した大量の草稿を整理して、『歴史的・文学的断章』という表題の下にできるだけ遺漏のない形で出版することです。

トレギエやラニオンの近郊で、何世紀もの塵に埋もれたブルトン語の演劇や悲劇の古い写本を、家の薄暗い片隅の、どこかの床の上に見つけようと、いったいどれだけの古い屋敷や煤けた掘っ立て小屋を訪れたことでしょうか。何度、荒野や川縁で歌う若いのにきな羊飼いの脇に腰掛けて、古代の香りの沁みこんだ詩情の息づく魅力的なバラードを筆写したことでしょう。(……)たしかにド・ラヴィルマルケ氏の本は魅力的で貴重なものを含む良心的な仕事です。しかし

歴史的事実や年代記に記されていない事柄を伝える歌を集めることに専心したために、その歌集は完全なものとは言えませんし、また氏自身そう主張してはおりません。(……) 大臣閣下、私は膨大な数の民衆歌とスーヴェストル氏が『最後のブルトン人』で言及していない劇の写本を幾つか集めました。われわれの調査は二つの小教区に限られていましたが、もし私がブルターニュ中を踏査することができていたならば、その成果はさらに大きく、さらに興味深いものになっていたことでしょう⁽⁴⁴⁾。

つまり、この手紙は民衆文学の調査のための公的な助成金の申請を目的として書かれていたのである。とはいえ、見ての通り、そこにはまた彼の人生の指針がきわめて明瞭な形で示されてもいた。すなわち、ひとつには叔父の遺稿を整理して出版すること、いまひとつは「われわれ」、つまり叔父とともに始められた民衆文学の収集を続けて、ラヴィルマルケやスーヴェストルらの先駆的な仕事を補完することである。叔父の死からほぼ二年を経て、リユーゼルは自らの使命が、叔父の遺した仕事をまとめ、かつ継承することにあることを、ここではつきりと宣言していたのである。

それにしても、彼はいつこのような決意を固めたのだろうか。あるいは、そもそも彼はいつから収集を始めたのだろうか。文面から判断する限り、それはすでに叔父の生前から始まっていたようにも思える。が、実際には、四三年以前に彼が収集に関心をもっていたことを知らせるものはない。おそらく、直接のきっかけとなったのは、彼が叔父の死後引き継いだ膨大な遺稿だったのだろう。そこに残されていた叔父の収集の記録が、リユーゼルの関心に火を点けたのではない。実際、リユーゼルの最初のファイルド・ノートは一八四四年、すなわち叔父の死の翌年から始まっているのである⁽⁴⁵⁾。ところで、この手紙でリユーゼルが申請していた民衆文学に関する公的調査とは、古代フランスに関する資料を発掘するために、モンタリヴェやギゾーが公教育相であった時代から政府によって奨励されていたものだった⁽⁴⁶⁾。しかも、こ

のとき公教育相であったサルヴァンデイーはサント・ブーヴの友人であり、民衆歌を始めとする地方文学に格別の関心を寄せていたのである⁽⁴⁷⁾。幸いリユーゼルの手紙は公教育相の関心を惹き、ほどなく彼のもとには三〇〇フランの助成金が届く⁽⁴⁸⁾。

一八四五年十一月、彼は収集の成果をサルヴァンデイーに送る⁽⁴⁹⁾。内訳は、印刷本が二冊、写本が九冊、それに民衆歌の翻訳を含む自筆のノートが二冊であった。審査委員会は翌四六年に開催され、報告書の作成に当たっては、ラヴィルマルケにも協力が仰がれた。しかし、残念ながらその評価は芳しいものではなかった。たとえば、印刷本に関しては「すでにスーヴェストルが『最後のブルトン人』のなかで分析している」と指摘され、写本の方も大半が「不完全」だの「新しい」だのといった評言で片づけられていた⁽⁵⁰⁾。とりわけ民衆歌については手厳しく、「ラヴィルマルケ氏のはるかに広範な書物が出た後では、ほとんど何の役にも立たない」とコメントされ、さらにこう付け加えられていた。「カルネ氏の評価は、これらの歌が十七世紀以後に作られた非常に新しいものであり、民衆を前に野外で歌う目的で、僧侶や書店主たちがフランス語の歌から翻訳したものということである。そのブルトン語はかなり崩れたものであり、フランス語風の言い回しが少なからず混ざっている⁽⁵¹⁾」。

同年八月、リユーゼルはさらに二度にわたって助成金の更新を求める。が、前回の調査の結果が好ましくなかったせいだろうか、申し出はすべて却下されている。そればかりではない。リユーゼルの申請は、その後何年にもわたってことごとく拒否され続けることになるのである。

教師リユーゼル

ところで、リユーゼルはその人生の大半を教師として過ごした。その期間は、ときに中断はあれ三〇年にも及ぶ。最初

に教職に就いたのは一八四八年、二十七歳のときだった。この年、彼はコレージュの教師としてディナンに赴任する。以下、しばらくこの教師リューゼルの姿を追ってみよう。

最初に彼が赴任したディナンのコレージュは、当時、近くの小神学校と競合して生徒数が激減するなど厳しい状況にあった。とくに一八五〇年にファルー法が制定されて教育が自由化すると、その凋落は決定的なものになった。五〇年から五一年にかけては、生徒数も予算も教員数もほぼ半減し、市はコレージュの閉鎖を検討し始める⁽⁵²⁾。こうしたなかで、リューゼルはすぐに異動の候補者として名が挙げた。校長が作成した報告書によれば、理由は二つあった。

ひとつは、彼が第七学年と第八学年の学級を分けるために校長が提案した教師と生徒監督 *maître d'études* の兼任を拒否したこと、いまひとつは、ディクテの際に不適切な内容のテキストを使用したことである。そのテキストはドイツの民衆詩集からリューゼル自身が訳出したもので、校長の言葉によれば「いかがわしい文学的趣味の、生徒の年齢にふさわしくぬ、くだらないもの⁽⁵³⁾」ということだった。この評言を裏付けるように、報告書はまた「前年、彼は客が賭博に興じる評判の悪いカフェに出入りしていた」とも付け加えていた。

実際、ディナンにおけるリューゼルは、地元の週刊誌『ランディカトゥール』*L'Indicateur* に参加したり、共和党の代議士に立候補したりするなど本業以外の活動にも積極的だった⁽⁵⁴⁾。報告書には触れられていないが、こうした態度が周囲の反感を買った可能性は十分にある。いずれにせよ、リューゼルはディナンでの生活をわずか三年で切り上げ、一八五一年十月から新しい任地へと移る。場所はパリ北西部の小都市ポントワーズ *Pontoise* であった。

この町のコレージュでの彼の評判は、ディナンとは違い、なかなか良好であった。もつとも、その理由は、リューゼルの努力のためというよりは、むしろ故郷を遠く離れた異郷での生活が強い孤独にあっただけらしい。一八五三年、彼は両親に宛ててこう書いている。「私は大変な孤独のなかで暮らしています。ほとんど誰とも交際していませんし、できるだ

け人に頼らずに、何でも自分でやるように努めています。こんな生活が寂しく退屈なのはもちろんですが、いまはこうするしかないのです⁽⁵⁵⁾」。同じ手紙はまた、ポントワーズの市場で偶然コワツフを被った二人のブルトン人女性と出会い、最近家に招待されたとも告げていた。

もつとも、ブルターニュからの追放がもたらしたものは、孤独ばかりではなかった。それはまた彼の収集活動にも甚大な影響を及ぼさずにはいなかった。実際、ポントワーズ滞在中、リューゼルは一切収集活動を行っていない⁽⁵⁶⁾。もちろん、ブルターニュとの距離を考えればそれも当然のことであつたが、人生の大きな目的のひとつを奪われた彼の不満は想像に難くない⁽⁵⁷⁾。

いずれにせよ、彼にとって収集もままならず、知り合いもないこの町に長居をする理由はなかった。翌一八五三年、リューゼルはついにポントワーズを離れる決心をする。新たな任地にはパリを希望したが、受け入れられなかった。一八五四年十一月、リューゼルは今度は病気を理由に一年間の休暇を申請する。

もちろん病気というのは口実に過ぎなかった。それでは、この休暇の間、リューゼルは何をしていたのだろうか。記録に残っているのは、まず歌の収集である。たとえば、五四年十月、彼はすでにバー島に行つて、歌を二つ採集したらしい。帰郷後は、故郷プルアレの近郊でも収集を続け、さらに妹カトリヌの家を訪ねた際にも、召使から歌をひとつ採集している。こうした収集活動は年末から翌年にかけても続き、その間に彼がノートに筆写した歌は十二篇ばかりに上つた⁽⁵⁸⁾。ポントワーズにおける三年間の空白の憂さを晴らすかのような旺盛な仕事ぶりであつた。

しかし、一年間の休暇の後も、リューゼルは教職には復帰しなかった。それどころか、彼はさらなる休暇の延長を申請する。その後の行動については余り知られていない。ネルヴァルやゴーチエと交友し、ハインリヒ・ハイネの埋葬に立ち会つたとも言われているが、ネルヴァルの援助の下にライン河畔でロマンチックな巡礼行を行つたという説もある⁽⁵⁹⁾。

いずれも確たる根拠に基づくものではないが、少くとも彼が五六年と五七年の二度にわたってアルザス地方のアグノー Haguenau に滞在したのは事実のようだ。当時のリューゼルにおけるドイツ文学の影響の大きさを窺わせるものと言えようか。ちなみに、この休暇中は創作の面での成果も少なくなかった。一八五六年には、詩集『剣の歌』*Chants de l'Épée* を出版。このフランス語による一〇〇ページばかりの詩集には、明らかにブリズーやネルヴァルなどの影響が認められた。同じ年にはまた雑誌『レーグル』*L'Aigle* に、「マキヤベリとシェークスピア」*Machiavel et Shakespeare*、「シェークスピアとヴォルテール」*Shakespeare et Voltaire* なる二つの文学論も発表。もともと、表向きはリューゼルの著作とされるこれらの論考は、実際にはいずれも叔父ルユエルの遺稿を下敷きにしたものであった。一方、アグノー滞在中の五六年八月には、「ブルターニュの幾つかの風俗や古い慣習を忠実に描く」⁽⁸⁰⁾ ことを目的として、『アルジュール・メンギー』*Arzur Menguy* なる小説を構想。同年十月にはブルトン語による初めての詩作も試みられている。こうして始まったリューゼルのブルトン語の詩は、やがて数の上でフランス語の詩をはるかに上回ることになる。

ところで、処女詩集『剣の歌』の巻末には、著者が今後出版を予定している作品のリストが掲載されていた。「ソネットとバラード」、「ソーンとグウェルス」といった表題が並ぶそこに、ひとつだけ「研究」*étude* と題されたものがあつた。『ブルターニュ演劇研究』*Études sur le théâtre breton* がそれである。少年時代に遭遇した『聖トリフィヌ』の上演以来、民衆劇にたいする関心はリューゼルの脳裏を去らなかつたのである。

一八五七年末、彼はその民衆劇の調査のためにパリの国立図書館を訪れる。この訪問は思わぬ副産物を生んだ。というのも、そのときたまたま応対に出た司書が、同じトレゴール地方出身のブルトン人だったからである。異郷の空の下、偶然が引き合わせた二人のブルトン人はたちまち意気投合する。これがリューゼルとルナンの最初の出会いであつた。

(つづく)

註

- (1) Ernest Renan, *L'âme bretonne*, Editions Philippe Camby, 1982, p.7. のテキストはタイトルこそ違え、*La poésie des races celtiques* といったく同一の内容である。*La poésie des races celtiques* の *race* の訳語については、あるいは「人種」もあり得るかもしれないが (Cf. 工藤庸子『ヨーロッパ文明批判序説』、東京大学出版会、二〇〇三年、三三〇—三三一頁)、やはり日本語として相当の違和感があることは否めず、またこの時代の *race* の多義性を考慮すれば、その意味を「人種」のそれに限定する必要もないと考えた。
- (2) *Ibid.*, p.10.
- (3) *Ibid.*, p.20.
- (4) *Ibid.*, p.25.
- (5) たとえば、拙論『ラヴィルマルケとリユーゼル (二)』、鹿児島大学法文学部紀要、「人文学科論集」第59号、二〇〇四年、六〇—六一頁を参照。
- (6) E. Renan, *op.cit.*, p.46.
- (7) *Ibid.*, pp.46-47.
- (8) *Ibid.*, p.52.
- (9) *Ibid.*
- (10) 事実、註(8)の引用は次のように続く。「こうした意見を表明するからといって、この書物が今世紀でもっとも興味深い書物のひとつであるということが揺らぐわけではない」。
- (11) *Les Bardes bretons du VI^e siècle* の日本語訳として、著者はこれまで『六世紀のブルターニュのバルドたち』というタイトルを当ててきたが、ここで取り上げられているのがすべてウェールズのバルドであることを考えれば、『六世紀のブリトン人のバルドたち』と訳す方が正確かもしれない。しかし、実際にはラヴィルマルケ自身がこの *breton* という語の多義性を利用していたふしがあり、この問題は一筋縄ではいかない。筆者は、内容はともあれ、この書物の比重は明らかに「ブルターニュ」にあると考え、ここでも従来通り『六世紀のブルター

ニユのバルドたち』と訳すことにした。

- (12) *Ibid.*, pp.51-52. この引用部分は、この論考が一八六〇年に *Essais de Morale et de Critique* に収録された際には削除されたという。理由はルナンが思い直したというよりは、たぶん同じ *Académie des Inscriptions et Belles-Lettres* の会員になった著者にたいする礼儀としてであろう、というのが Francis Gourvil の推測である。Cf. F. Gourvil, *Theodore-Claude-Henri Hersart de la Villemarqué et le «Barzaz-Breiz»*, Oberthur, 1960, p.120.
- (13) Théodore Hersart de La Villemarqué, *Les Bardes bretons du VI^e siècle*, Paris, Jules Renouard, Rennes, Vannier, 1850, ix-x.
- (14) この確信の起源は、一八三八―三九年のウェールズ旅行にある。帰国後、公教育相に提出したレポートには以下のようにある。「私たちはそこにいまひとつ驚くべきテーマを見いだした。それは、タリエシンの言語がまさに今日のバス・ブルターニユの農民たちが話している言語だということである。私が彼らにタリエシンの歌の断片を読んで聞かせたところ、彼らはそれを理解した。一方、ウェールズの学者たちはほとんど解らなかったのである。メルランの韻律法はわれわれの農民の民衆歌のそれだし、これまでヒヤワッヘンや彼と同時代のウェールズのバルドたちに特有のものだと思ひ込まれてきた幾つかの韻律形式は、われわれアルモリカの最古の民衆歌においても見いだされるのである。このタリエシンの言語とアルモリカのブルトン人の言語との同一性は、ウェールズの古歌が本物であることを主張する上で強力な論拠のひとつとなる」(T.H. de La Villemarqué, *Rapport sur la littérature du Pays de Galles adressé à M. Le Ministre de l'instruction publique*, Imprimerie de Paul Dupont et C^e, Paris, 1839, pp.4-5)。
- (15) この旅行の成果は乏しいものだったが、ローマでは偶然ルナンに会ったらしい。これは F. Gourvil が、M^{re} T. De Boisanger が abbé Batany に宛てた手紙を根拠に伝えるもので、それによると、ルナンとラヴィルマルケの間で交わされた会話は以下のようなものである。「こんなところでお会いするなんて何という偶然でしょう」「いいえ、ルナンさん、ローマで出会うなんて、偶然と言うより、神の業ですよ」(F. Gourvil, *op. cit.*, p.124)。少なくともこの会話から判断する限り、ルナンの批判は二人の関係に影響を及ぼさなかったようだ。
- (16) Donatien Laurent, *Aux sources du Barzaz-Breiz*, ArMen, 1989, p.11; F. Gourvil, *op. cit.*, p.169.
- (17) Cf. Georges Mahé, *Brizeux, Essai de Biographie*, Librairie C. Klincksieck, Paris, pp.55-67.

- (18) F.-M. Luzel, *Bapred Breizad*, Morlaix. Haslé. Nantes, Forest et Grimaud. Paris, Hachette, 1865, p.9.
- (19) Françoise Morvan, *François-Marie Luzel, Enquête sur une expérience de collecte folklorique en Bretagne au XIX^e siècle*, Terre de Brume-Presses Universitaires de Rennes, 1999, p.117. Pierre de la Villemarqué & F. Gourvil はこの手紙を一部しか引用していないが、中には全文が掲載されている。Cf. P. de la Villemarqué, *La Villemarqué, sa Vie et ses Œuvres*, Champion, 1926, p.163; F. Gourvil, op. cit., p.150.
- (20) F. Morvan, op. cit., p.118.
- (21) F. Morvan によれば、リューゼルの生年月日は曖昧である。彼自身は一八二二年六月二十一日と言っていたが、ときに一九二二年六月二日とも書いているという。なお、戸籍の記載は一八二二年六月六日である。Cf. *Ibid.*, p.35. なお、リューゼルの伝記にはこの F. Morvan のもののほか、Abbé Pierre Batany, *Luzel, poète et folkloriste breton 1821-1895*, Imprimerie brevetée Maurice Simon, 1941 がある。F. Gourvil のラヴィルマルケ論に対抗して書かれたこの博士論文は、レンヌ大学における審査の際には激しい議論の的となったという。本稿におけるリューゼルの伝記的事実は、その大半をこの二著に負っている。なお、同一の内容がどちらにも記載されているときには、できるだけ両方の出典を明記するようにした。
- (22) この叔父はまた『エモンの四人の息子たち』*Quatre fils Aymon* という民衆劇の写本を、十四歳のとき（一七八四年）に筆写しているという。この劇の写本は今日わずかししか現存せず、したがってその仕事は貴重である。多くの民衆劇の写本を集めて国立図書館に収めたリューゼルも、この写本だけは終生手元から離さなかったという。いずれにせよ、この叔父はブルトン語演劇への関心という点で、彼の先達だった。Cf. F. Morvan, op.cit., pp.40-41.
- (23) *Ibid.*, p.38.
- (24) *Ibid.*, p.41.
- (25) *Ibid.*, pp.43-44; Abbé P. Batany, op.cit., pp.4-6.
- (26) *Ibid.*, p.46.

- (27) たとえば、先の「二人の敵弾兵」は父親の埋葬を歌ったものだった。
- (28) 「ケランボルニュでは、リュエゼルはいたるところにいる。彼のことを思い出そうとして、何か忘れてしまったとしても、妹のペリーヌとセラフィヌとマリヴォンヌがいる。兄の思い出と自分の家庭に頑固なまでに忠実な、敬うべき三幅対が。まるで伝説のなかで、神秘的な眠る人の番を命じられた人のいい老いた妖精のように」(Charles Le Goffic, *L'Âme bretonne*, deuxième série, Éditions Honoré Champion, 1912, réimpression, 1976, p.39)。
- (29) F.-M. Luzel, *Keranborn*, Librairie Lafolye, 1890, p.1. なお、ケランボルニュには Keramborgne, Keramborgn, Keranborn など幾つかの綴り方があがるが、本稿での読みは「ケランボルニュ」に統一した。
- (30) F. Morvan, *op.cit.*, p.47.
- (31) «Hénora Lestrezeo», *Revue de Bretagne et de Vendée*, 1864, pp.48-49. cité par F. Morvan, *Ibid.*, p.47.
- (32) F. Morvan, *op.cit.*, p.47.
- (33) この上演に関しては、リュエゼルが一八六四年四月に調査費を申請する目的で公教育相に送った手紙のなかで詳しく語られている。 Cf. *Journal de route*, Presses Universitaires de Rennes-Terre de Brume, 1994, pp.133-135.
- (34) *Ibid.*, p.133.
- (35) F.-M. Luzel, *Keranborn*, pp.2-3.
- (36) P. Batany, *op.cit.*, p.29; F. Morvan, *op.cit.*, p.53.
- (37) ルユエールはまだノルマリアンであった一八二〇年代末に、すでに故郷の民謡について家族に問い合わせていたという。 Cf. F. Morvan, *op.cit.*, pp.54-55.
- (38) *Recherches sur les origines celtiques et sur la première colonisation de la Gaule, de la Bretagne, de l'Irlande et de l'Ecosse*, in Ogée, *Dictionnaire historique et géographique de Bretagne*, 1840. cité par F. Morvan, *Ibid.*, p.57.
- (39) Bernard Tanguy, *Aux origines du nationalisme breton*, vol 1, Union générale d'éditions, 1977, pp.244-245.

- (40) F. Morvan, *op.cit.*, p.57.
- (41) ちなみに、コレージュ・ド・フランスにケルト学の講座が創設されたのは一八八二年、レンヌ大学では一八八六年であった。Cf. *Ibid.*, p.58.
- (42) *Histoire de la Constitution anglaise*, préface d'Arthur de La Borderie, p.LIM, 1863. cité par F. Morvan, *Ibid.*, p.59.
- (43) このルユエールの自殺の顛末については、P. Batany, *op. cit.*, p.31; Morvan, *op.cit.*, p.62.
- (44) F. Morvan, *op.cit.*, pp.69-70.
- (45) *Ibid.*, p.67.
- (46) P. Batany, *op.cit.*, p.36.
- (47) ちなみに、翌一八四六年にブリズーとラヴィルマルケがレジョン・ドヌール勲章を授与されたのも、このサルヴァンデーイのおかげだった。これについては、拙論『ラヴィルマルケとリュエール(二)』、鹿児島大学法文学部紀要、「人文学科論集」第五九号、二〇〇四年、七五頁を参照。
- (48) P. Batany, *op.cit.*, p.37.
- (49) のちにリュエールは、このときブルターニュを調査する時間は十日程しかなかったと告白している。Cf. *Correspondance Luzel-Renan*, Presses Universitaires de Rennes-Terre de Brune, 1995, pp.66-67.
- (50) P. Batany, *op.cit.*, pp.38-39; F. Morvan, *op.cit.*, pp.73-74.
- (51) *Ibid.*, p.39; *Ibid.*, p.74. 民衆歌の評価がとくに手厳しかったのは、相談役となったラヴィルマルケの影響があると考えていいだろう。
- (52) F. Morvan, *op.cit.*, p.81.
- (53) *Ibid.*, p.82.
- (54) この選挙の結果は落選。しかも獲得票数は八票という惨憺たる有様だった。Batanyはこの結果を六票と伝えているが、Morvanはこれを訂正している。Cf. P. Batany, *op.cit.*, p.41; F. Morvan, *op.cit.*, p.81.
- (55) *Ibid.*, p.43; *Ibid.*, p.86.

- (56) しかし、ポントワーズの生活は詩作においては多くの成果をもたらした。この時期、彼はまた『バルザズ・ブレイス』の歌の韻文訳を試みている。 Cf. F. Morvan, *op.cit.*, p.84.
- (57) では、リューゼルはこの町に来るまで、いったいどれくらいの歌を収集していたのだろうか。それを知る手掛かりとなるのは、一八五二年に公教育宗教省が発表した「フランスにおける民衆詩の集成」の計画の際にリューゼルが送付したコレクションである。そこには、ブルトン語の歌の翻訳が八六篇、フランス語の歌が一篇あった。これが、それまでに彼が収集した歌のすべてであったかどうかは分からない。しかし、ともかくもこの事実は、彼の収集がこの時点ですでにかなりの量に達していたことを示していた。 Cf. *Ibid.*, pp.84-86.
- (58) *Ibid.*, pp.89-92.
- (59) これはジョゼフ・ロート Joseph Loth の説である。 Cf. *Ibid.*, p.100.
- (60) P. Batany, *op.cit.*, p.47.